

[学年・学校経営]

初任者教師が捉える自信と成長に関する事例研究

－校内研修における「振り返り記述」と「レポート」の分析を通して－

岩月 元汰*

1 はじめに

「分かっていないことが分からない」初任者教師として経験した1年目を振り返って思う。初の教師という職業に就いたことによる職場環境や授業づくり、子どもとの関わりに対する期待や不安、それらの悩みに追われ、何が普通で、何が間違っていて、何を尋ねたらいいのか、挙句は、指導や助言を受けるもその意味が分からないといった戸惑いの日々だった。そんなときでも、教材研究に悩んでいると声を掛けてくれる学年主任、学級の特別な支援を要する子どものことを気に掛けて相談に乗ってくれた特別支援教育コーディネーター、日々のたわいのない話を持ち掛けて気持ちに余裕を与えてくれた同僚など、支えてくれた同僚がいた。そして、その支援は初任者教師である私に対してだけではなく、若手教師、中堅教師、管理職などが立場関係なく互いに施され、真剣に話し合ったり、時には楽しそうに話したりしながら皆が対話し、学び合う職場があった。

そのような環境で働き続け、3年目の今では、自分に対する自信と成長を感じ、前向きに取り組むことができている。実際に、2年目、3年目になると先輩・同僚から、「変わったね」「成長したね」と声を掛けられることも増えた。では、どうして自信や成長を感じるに至ったのだろうか。本研究では、職場の「対話し、学び合う関係」に着目して、初任者教師の成長について考えたい。

2 問題の所在と研究の目的

近年の新潟県の教員採用試験の倍率を見ると、平成30年から1.9倍、1.2倍、2.5倍と全国でも低い水準となっており、初任者の質の低下が懸念されている。また、採用後は、近年の教員の大量退職・採用の影響により、初任者は、学校現場における実践の中で、経験豊富な先輩教員からの知識・技能の伝承をうまく図ることができない状況にあるといった指摘が多く、学校現場での教員の力量形成のあり方が喫緊の課題となってきた。

さらには、外国語と道徳の教科化やプログラミング教育の導入などの新たな取組が追加されながらも「学校における働き方改革」の推進により、放課後はひたすら個々の仕事を黙々とこなし、それが終わるとできるだけ早く退勤するという個別化・孤立化した職場環境が形成されつつある。したがって、益々初任者教師は、先輩教師へ声を掛けづらく、質問しづらくなり、疑問や不安を解消する機会が損なわれてしまっている。

しかし、文部科学省は、「教員は学校で育つ」ものであり、同僚の教員とともに支え合いながらOJTを通じて日常的に学び合う校内研修の充実や自ら課題を持って自律的、主体的に行う研修に対する支援のための方策を掲げており、校内における学びこそが、初任者教師をはじめとした教員の資質能力向上において必要不可欠なものとしている。

先行研究を見ると、中妻（2011）は、「校内研究において子どもの実態を土台とした研究内容を実施している学校」では、「子どもの反応を生きがいとする教員の資質向上に役立ち、教員の成長を研究が支えることになる」とし、「若手教員の育成に果たす役割として校内研究が大きい」と述べている。

また、伊藤・桂・高井良ら（2016）は、「初任期の教師の成長を感じられる契機」として、「役割や仕事を任せられることで、それが認められている感覚につながり、学校組織の一員となる感覚につながる」と述べつつ、一方で、「初任者教師が年長の同僚との関わりに戸惑いや遠慮を感じる傾向があるということから、どうすれば世代を超えた学びが容易になるかが課題」だとしている。

B市立A小学校では、伝統的に生活科・総合的な学習の時間（以下、生活・総合）をカリキュラムの中核に置き、教

*上越市立大町小学校

師同士がその活動中における子どもの姿を広く捉え、意味付け合う校内研修を行っている。週1回のペースで実施する校内研究では、子どもの姿や実践をお便りに綴り、それを基に対話する「おたよりセッション」(H30, R1)や活動公開を行った際に行う、「活動公開振り返りセッション」(R1)などの教員感で行う「セッション(小グループでの対話活動)」を通して、年齢層、経験年数に限らず互いに関わり意味付け合うことで開放性と同僚性を大切にしている。また、「セッション」後には、振り返り記述として、学びを省察した記述を残し、集約したものをその度に配付して、個々の学びを共有・蓄積している。このように、A小学校では、校内研修において、「セッション」による職員間のコミュニケーションや振り返り記述による自己の省察の機会がある。

本研究では、実際にこのような職場環境の中におかれた初任者教師は、校内研修や日常の対話の中で、どのように意識が変容し、成長や自信を感じるに至ったのか、その要因を、当事者及び先輩同僚の記述から分析を通して明らかにし、職場における初任者教師の意識の在り方や初任者教師育成の在り方を提言したい。

3 研究の方法

(1) 研究の対象

本研究では、当事者としてA小学校に在籍する筆者本人(以下、I教諭)を研究対象とした。I教諭の経歴は以下の通りである。

【採用1年目(平成30年度)】小学校第2学年2組担任、【採用2年目(令和元年度)】知的障害学級担任、【採用3年目(令和2年度)】第3学年1組担任

(2) 調査期間とデータの収集

調査期間は、I教諭がA小学校に赴任した平成30年4月から、令和2年5月までとした。調査データは研修後の振り返り記述や1学期末と年度末それぞれに執筆したレポートを中心に、それらを時系列で整理した(下表参照)。その中でも、I教諭自身の思いや意識に関する記述を抽出し、分析を行った。

【表1 データ分析を行った校内研修の振り返り記述・レポートと当時の研究主題・副題】

年度	調査データ	研究主題	研究副題
平成30年度	お便りセッション振り返り記述9回、レポート2回	『本気』が生まれる学校	「わくわく学習」の単元開発とカリキュラムづくり
令和元年度	お便りセッション振り返り記述6回、活動公開振り返り記述15回、レポート2回		子どもの「本気」を見る
令和2年度	全体研修振り返り記述7回		子どもとの営みを問い直す

4 研究の実際

(1) 【1年目】困難から見出した表出する価値

【5/10 お便りセッション1の振り返り記述】お便りにどんなことを書けばいいのか具体的によく分かりました。(中略)授業や場面指導の一場面を載せていき、子どもの「気付き」にも注目して書いていきたいと思います。

【7/5 お便りセッション3の振り返り記述】(前略)①子どもが本気になるためにどんな手立てや声掛けができるのかを日々悩んでいますが、お便りセッションを通じてたくさんのヒントが得られました。②私は生活科に対する考えが「これでいいのか?」「こういうやり方で本当にいいのか?」と思いながらやっていますが、支援プロの方にも質問や感想を言っていただき、自分のやり方を振り返ることができました。(中略)③総合的な学習の時間について、もっと勉強していなくてはと思います。

【6/7 お便りセッション2の振り返り記述】これからも子どもたちの生活科を生活化できるように一緒に楽しんで活動していきたいと思います。

【8/9 1学期課題レポート記述】(前略)これだけではなく畑おこしから行った活動の積み重ねや周りの友達との関わりなどの要因もあわさっていると考えられるので、さらにいろんな働きかけができるようになりたい。(中略)こういった、お世話になった人へのふるまいや収穫の喜びを共有することでさらに共同する楽しさや達成感得させ、人とかかわりを強いものへとしていきたい。(中略)そこで得た自信をさらに2学期以降で大きくしていくために、一つ一つの活動の質を上げられるように動かしていきたい。(中略)2学期は、わくわくフェスタがあるので、子どもたちの野菜への思いや学んできたことを十分に表現できるように支援したい。

1年目1学期の振り返りやレポートの記述には、「～したい」という言葉が随所に見られ、先輩教諭からの様々なアドバイスを受け取りながら次へ生かそうとするI教諭の意欲を感じる。

一方では、「①・②・③」のように生活・総合における子どもへの指導について、悩んでいた心境が伺える。A小学校における生活・総合は、I教諭にとって困難を要するものの一つだった。さらに、A小学校では、それをもとに週1回のペースでお便りを執筆している。それらは、教職4か月目のI教諭に、苦悩や多忙さを感じさせていたのだろう。

そうすると、「～したい」という言葉には、経験を重ねた先輩からのアドバイスに対して、やってみたいという思いがある半面、実際にやろうとしても思うようにできないもどかしさ、やってみた際には「②これでいいのか?」という不安や迷いを感じていたことが考えられる。

このように、I教諭は、疑問や不安、迷いを抱えながらも日々ひたむきにセッションに参加し続けた。

【11/1 お便りセッション4の振り返り記述】(前略) 子どもたちの思いに担任の思いを加えて保護者へと伝えていくことができるお便りは、とてもいいものだと感じました。(後略)

【11/8 お便りセッション5の振り返り記述】④お便りで活動を意味付けることが、教師にとって振り返ることにもなり、これからのことを考えることにもつながるという意見を聞き、とても納得しました。⑤活動をどう言葉にして、伝えていくかが難しいと感じていますが、⑥それ自体が自然と振り返りになっていたんだと感じました。(後略)

【1/24 2学期課題レポートセッション振り返り記述】⑦レポートにまとめ、それについて話すことで、自分がどんな意識をもって指導しているのかが分かってきました。(後略)

2学期の【お便りセッション5】では、I教諭に変化が見られた。これまで苦戦していたお便りについて「④」のように、お便りに対して自分なりの書く意味を見出したのだ。その日のセッションで同グループだったH教諭(当時教職3年目、男性)の振り返り記述でも「私たち、教師もお便りを書くことで実践を振り返り、今後の活動を思い描いています」と、お便りを書くことを意味付けていた。I教諭は、段々とセッションを通じて、一つの困難であったお便りに意味を見出しはじめた。また、「⑤」のように、依然として困難を感じながらも、「⑥それ自体が自然と振り返りになっていたんだ」と、お便りで悩むことにも意味を見出した。それは、I教諭が苦戦してきたお便りが、無意識のうちに自身の振り返りになっていたことや「これからのこと」つまり「今後の活動」につながることにより気付いたのである。そして、その気付きは、レポートを書く意味にもつながった。【2学期課題レポートセッション振り返り記述】には、自分の考えを「⑦レポートにまとめ、それについて話すこと」は、「⑦自分がどんな意識をもっているのか」を知ることにつながる、つまり、「自己の省察」になるとレポートやセッションを意味付けている。

このように、1年目では、セッションによる同僚からの意味付けによって、生活・総合やお便りへの困難に対して「書くことの意味」を見出し、自らがセッションやレポートを意味付けていく過程で、表出する価値を感じるようになったのである。

(2)【2年目】表出したことで感じた自分らしさ

【5/23 お便りセッション2振り返り記述】⑧K先生から「名前を書くといい」と言われたことは、なるほどと思いました。(後略)

【6/27 お便りセッション3振り返り記述】⑨前回のお便りセッションから名前を入れて見たところ子どもたちの具体的な姿を書けるようになってきました。(中略) ⑩子どもは、どうしてその行動をとったのかを考えて教師なりの意味付けをすることで、より子どもと教師の本気が保護者に伝わるお便りになるのだと思いました。

【7/4 お便りセッション4振り返り記述】(前略) ⑪お便りセッションを終えるたびに自分のお便りが変わっていている気がします。(後略)

【1学期課題レポート記述】(前略) ⑫1年目の今では、見えなかった、いや、見えていたのだが気付かなかった(子どもの)姿に気付くようになった気がする。それは、昨年からの⑬研修やセッション、日々の対話によって自分の考えや視点について話し、助言をいただいていたからこそだと思う。

【8/23 1学期課題レポートセッション振り返り記述】⑭コミュニティ・スクールの皆さんが素直に思ったことを言うてくださることで、活動の可能性が広がっていく気がしました。一人で考えていても考えられることでしかないですが、⑮いろんな方とセッションすることで視野が広がり活動の可能性が広がっていくことを実感します。(中略) ⑯特支の活動を含め、もっともっと発信することで、いろんな方々の目線から意見をいただけるのかなと思いました。

【お便りセッション2】では、提案者として、自身のお便りについてセッションし、同グループのK教諭（A小3年目、30代、副研究主任、女性）からのアドバイスをいただいた。その後の【お便りセッション3】では、「⑨」のように、アドバイスを生かしたことによるお便りの変化について話した。すると、そのセッションで同グループだったT教諭（A小5年目、30代、女性）は、振り返り記述に「前のセッションでの意見を実際にやってみたとのことでした。セッションをやる意味ですね。いいことだと思いました」と意味付けた。また、I教諭も「⑩」の記述のようにK教諭のアドバイスと今回のセッションからお便りを意味付けている。

そして、【お便りセッション4】では、「⑪」のように、セッションを通じての自身のお便りの変化を自覚した。

I教諭は、お便りが変化したと記述しているが、自身の実践や思いを記述するお便りが変化したという意味では、実際I教諭自身も1年目から変容してきたのだと考える。【1学期課題レポート記述】のように、「⑬研修やセッション、日々の対話によって自分の考えや視点について話し、助言をいただいていたからこそ」I教諭は、「⑭気付かなかった（子どもの）姿に気付けるようになった」と、これまでのセッションや日常的な同僚との対話による自己の変容を感じている。さらに、【1学期課題レポートセッション振り返り記述】では、「⑰・⑱」のようにセッションを意味付け、I教諭自身が「⑲発信することで、いろんな方々の目線から意見をいただける」と、セッションや対話による「自己を表出することの意味」を見出したのである。

【10/17 お便りセッション5振り返り記述】⑳「こうやって話すことは、今の自分の教育観や実践に自信がもてるようになるいい機会だと思いました。どうしても㉑（実践を）やる前ややった後で不安や後悔があるのですが、こうして活動を意味付けてもらったりこれからに向けて意見をもらえたりすることは、そうしたマイナス面が払拭され自信ややる気が大きくなるなど感じます。

【11/21 お便りセッション6振り返り記述】（前略）㉒「去年よりお便りを書くのが楽しくなった気がします。（中略）いろんな先生のお便りを参考にしながらも㉓自分の言葉で書けるようになりたいと日々思っています。悩みながらそれっぽいことを書いても、㉔これは自分の言葉なんだろうかと思うことがまだまだあります。（後略）」

【2/6 2学期課題レポートセッション振り返り記述】（前略）㉕「セッションやレポートを重ねていくことで、型にはまった言葉ではなく、自分自身の言葉で話せるようになってきたように感じます。それは、㉖どんな自分を話しても受け入れ、意味付けてくださる環境があるからです。（中略）A小でのセッションや日々の対話を通して、㉗一見余裕をもって授業をしているように見える先生方は、子どもと一緒に（それ以上に）悩んでいること、葛藤していることを知ることができました。㉘分からないこと、悩んでいること、不安がることの羞恥心を捨てること、もっと自分の考えを表出し、共有することのよさが分かってきました。授業公開、セッション等、㉙A小でのすべての経験が今の自分に生きていると感じます。（後略）」

2学期になると、その意味により具体性が増してくる。【お便りセッション5】の「⑳・㉑」の記述を見ると、セッションや対話を通して「話すこと」が自身の教育観や実践への自信につながることで、「意味付け」や「他者からの意見」が不安や後悔の払拭となり、自信ややる気の増大につながることを感じている。

【お便りセッション6】では、I教諭は、お便りに対する「㉔これは自分の言葉なんだろうかと思う」という疑問をもちながらも「㉓自分の言葉で書けるようになりたい」という思いを抱いている。お便りに悩みを抱えながらもI教諭には、その思いがあるからこそ、「㉒」のような喜びを感じられるのだと考える。この悩みは、I教諭の中に、確かな自分の思いがあるからこそ抱えてしまう、どのように自己を表出したらいいのかというもどかしさであり、1年目に見られた「①・②・③」の悩みとは明確に異なるものであると考える。

そして、【2学期課題レポートセッション振り返り】の「㉕」の記述からは、「㉔」での悩みを乗り越えたことで、I教諭は、明確な自分らしさを感じるようになったことが伺える。

I教諭は、その要因を、セッションやレポートの執筆と、「㉖どんな自分を話しても受け入れ、意味付けてくださる環境」を上げている。2年目のI教諭は、自分より経験年数を重ねた先輩方の中で自己を表出できたこと、それを受け入れられ、認められる環境があることが自己の省察と自分らしさ自覚することにつながったのだと考えられる。また、「㉗」のように、同僚の悩みや葛藤、弱みに感じていることを同じようにさらけ出し、共有するからこそ、I教諭も「㉘」のように自己を表出・共有できたのだと考える。

I教諭は最後に、そういった環境である「㉙A小でのすべての経験が今の自分に生きている」と振り返り、1年目で

の生活・総合やお便りに対する困難だけでなく、A小学校での教職経験すべてに対して、その価値を見出した。

5 考察

以上のように、セッションや日常の対話及びそれら営みを振り返る記述やレポートを継続的・定期的実施することを通して、自己を表出・共有・省察してきたことが、I教諭の意識に変容をもたらし、自分らしさを自覚したことが、自信と成長を捉えることにつながったと考える。

時田（2011）は、「小学校初任者教師が捉える自己の成長には、他から賞賛されることであり、その成長の契機は、初任者自身の前向きな努力や校務分掌の経験、反省であるので、初任者の意欲の喚起、適正な校務分掌、適宜、省察をさせるなど、指導環境を整える必要がある」と述べている。「セッション」と「振り返り記述」がI教諭にとって自己省察や実践について他から意味付けされることがそれに当たる。A小学校での「セッション」は、お便り・レポート・実践等の1つのテーマについて、職員が対等な関係で意見を対話することを大切にしている。それは、決して指導ではない。タテの関係で成り立つ指導ではなく、ヨコの対等な関係による対話だからこそ、各参加者がもっているこれまでの経験に則した観や自分だから話せる思いをより開放的に表出できる。それは、表出することを許され、認められると感じられるA小学校の環境があるということも1つだろう。そんな環境の中でI教諭は、セッション・振り返り記述・レポートを重ねることによって、自己を表出するよさに気づき、段々とその価値を見出した。やがては、広げ深められた自己の教育観について対話し、同僚や自分自身から意味付けされ自己省察する中で、自分自身の変容を自覚し、自分らしさを感じるに至ったのだと考える。

したがって、山下・榎ら（2015）が述べる「様々な人・モノ・コトとの出会いの中で青年期の初任教師は、アイデンティティの形成・再構築を果たしている可能性があり、それが、たとえ学級王国と揶揄されるものであろうとも、胸を張って、はつらつと児童に向き合う教師としての基盤にもなっている」ように、I教諭自身が自分らしさを自覚したことこそ、自信と成長につながったのだと考える。

6 提言

【3年目】となったI教諭は、R2年度の校内研究の振り返りに以下のように記述している。

- 【4/3 第1回全体研修振り返り記述】（前略）今回も最初のセッションということで、今の②⑨自分の思いを話しました。上手いことを話そうとするのではなく、③⑩本心で本音を話すことのよさを毎回感じています。（後略）
- 【4/9 第2回全体研修振り返り記述】（前略）A小学校3年目だからこそ、③⑪できること、分かることを生かしながらも分からないこと悩んでいることも素直にさらけ出していきたいと思いました。（中略）もっと③⑫自分に正直でいようと思えました。
- 【4/16 第3回全体研修振り返り記述】（前略）こうした場では、③⑬いろんな目線から見ていただき、自分の弱いところ、見えていない（見ようとしていない）ところを指摘されることで、保てているような気がします。③⑭先生方の本気の一言が本当にありがたいです。（後略）
- 【4/23 第4回全体研修振り返り記述】（前略）今回のセッションでも、③⑮私の迷い、もやもや、甘さに対してまっすぐに意見を言ってくださることが、きっと活動に生きるんだろうと感じました。（中略）③⑯分からないから、悩んでいるから話すことを大事にしたいと思います。
- 【5/7 第5回全体研修振り返り】（前略）セッションすることで、③⑰気付かなかった自分に気付くことができるのだと思いました。（中略）こういったことが言い合える関係づくりは、仕事のやりがいもそうですが、学級経営にも関わってくるのだなと改めて実感しました。

I教諭の【3年目】の記述をもとに、本研究にかかわって提言を2点示す。

(1) 初任者教師の姿勢

I教諭は、「②⑨・③⑩・③⑪・③⑫・③⑮」のように、自己のありのままを表出することに極めて価値を見出している。

山下・榎ら（2015）が、ある初任者教師の「積極的に職員室で自らの実践や状況を知ってもらおうべく、先輩・同僚教師との対話を創出する」行為が「承認や省察の絶好の機会になっている」と述べているように、I教諭は、2年間にあって、自身の実践や今の状況を知ってもらおうと表出してきた。

I 教諭は、セッションを繰り返すことで、日々の悩みや葛藤を受け止めるようになり、それについて対話することが、後に「36」のように自己省察になることに気付くことにつながった。このように初任者教諭は、悩みや葛藤、失敗さえも大切に受け止めながらも、それらを学びや気付きと同様に、表出しようとする姿勢が大切だと考える。

(2) 初任者教師育成における対話の有効性と可能性

I 教諭が自分らしさを自覚した要因に、対話による自己省察があった。こうした職場の職員間による対話は、初任者教師の自信と成長やその周辺の人間関係に大きく関わってくると考えられる。セッションの中で、教育といった正解のないものに対して、各参加者の意見を対話によって交えることで、1つの考えが押し付けられるのではなく、多くの考えが表れる。そして、それが広がっていくことによって、知識や技術の伝達に終わらず、各々の思考が広がり、そして深まることが、参加者の一人である I 教諭の意識の変容に影響したのだと考える。そうした意味では、初任者教師が先輩に囲まれた職場内で対話することは、職員の各々の教育観等が相互作用を起こし、自己省察を引き起こすと考ええると、初任者教師だけでなく、ベテラン教師であっても、教師力育成に向けて、さらには、職場内の人間関係づくりに有効であると言えるのではないだろうか。

7 おわりに

冒頭でも述べたが、今後も初任者教師の大量採用は続き、大規模校では複数人の初任者教師が採用される学校も増えてきている。そうした中で、以上のような対話を中心としたコミュニケーションを常日頃から取り入れていくことが、初任者教師がより自分らしく教師に誇りを持って取り組むことにつながると考えられる。また、本研究が今後の初任者教師の意識の変化と成長に対して有効に働いたと考えられるとともに、初任者教師育成の一助となれば幸いである。そして、筆者と同じように悩み、葛藤している初任者教師にとって、本研究がこの先への不安の緩和に少しでもつながり、希望を抱くことにもなれば、何よりである。

これからの長い教職人生、常に対話し続けることを通して、同僚や自分がより自信と成長を感じ、よりよい人間関係が築けられるよう、実践し続けていきたい。

引用・参考文献

- 伊藤安浩・桂直美・高井良健一（2016）「初任期における若手教師の経験と成長のモノグラフ（1）－第1回インタビュー調査の分析を通して－」大分大学教育学部研究紀要
- 中央教育審議会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」
- 時田詠子（2011）「初任者が捉える自己の成長－自由記述法による成長や失敗の省察より－」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊18号-2
- 中妻雅彦（2011）「校内研究における若手教員の成長と課題（1）」教育実践講座
- 山下晃一・榎景子（2015）「公立小学校初認教師の入職直後における葛藤と自己変革に関する事例研究－責任感の生成・変容の意義に焦点を当てて－」神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要 第9巻 第1号